令和6年度　学校評価計画書（最終評価と今後の課題）

石川県立金沢伏見高等学校

	重点目標		具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考	最終評価と今後の課題
1	生徒があらゆる場で誠実さ・聡明さ・品位・心の豊かさを追求できるよう、教職員は安全で規律ある教育環境を整える。	①	基本的生活習慣の確立を図るため、定期的にノーチャイムデーを設け、自ら時間を意識した行動をとれるよう指導する。	生徒支援課 各学年	時間を守る意識の高い生徒が増えている一方、時間を守るにあたり、教員の呼びかけや、授業開始1分前の予鈴を頼りにしている生徒もいる。	【成果指標】（生徒） 生徒が時間を意識した行動をとることができる。	（生徒）時間を意識した行動をとることができる生徒の割合が Ａ：９０%以上 Ｂ：８０%以上９０%未満 Ｃ：７０%以上８０%未満 Ｄ：７０%未満	Ｃ、Ｄの場合、指導方法を再検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	（生徒）評価Ａ　９６．５% ・時間を意識した行動がとれる生徒は多い。今後は定期的にノーチャイムデーを設定し、自ら時間を守ろうとする意識をさらに高めていきたい。
		②	定期的に「おは活」（朝のあいさつ運動）を実施し、生徒同士で自発的にあいさつできるようにする。	生徒支援課 各学年 各部活動	教師から働きかけることにより生徒の挨拶への意識は高まっている。しかし、自ら進んで挨拶をしようと意識している生徒の割合はまだ高いとは言い難い。	【成果指標】（生徒） 生徒が自ら進んで挨拶ができる。	（生徒）自ら進んで挨拶できる生徒の割合が Ａ：９０%以上 Ｂ：８５%以上９０%未満 Ｃ：８０%以上８５%未満 Ｄ：８０%未満	Ｃ、Ｄの場合、改善策を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	（生徒）評価Ｃ　８０．７%（参考：保護者71.6%） ・生徒が主体となる挨拶運動や地域の方々と触れ合う機会を設け、場面に応じた挨拶が習慣化するような取組を行いたい。
		③	いじめ防止に関する講話や教員対象の研修会などにより、生徒・教員ともにいじめに関する意識を高め、いじめの起こらない雰囲気をつくる。	生徒支援課 保健相談課 各学年	「いじめはどこにでもある」という認識のもと、実態の把握に努め、個々の事案について、組織的かつ迅速に対応している。小さな変化を見逃さず情報共有を行う体制を維持する必要がある。	【努力指標】（教員） いじめを見逃さない学校づくりに組織的に取り組んでいる。	（教員）本校の「いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめやネットトラブルの未然防止に学校全体で組織的に取り組んでいると回答する教職員の割合が Ａ：１００% Ｂ：　９０%以上１００%未満 Ｃ：　８０%以上９０%未満 Ｄ：　８０%未満	Ｃ、Ｄの場合、改善策を検討する。	７月と１２月に学校評価（教員）で調査する。	（教員）評価Ａ　１００% ・些細なことが人間関係をこじらせる原因となることがあるため、教員一人ひとりが生徒を観察するとともに、教員全体で情報共有し、いじめの未然防止、早期発見に組織的に取り組んでいきたい。
		④	学校生活の中で、環境保全に対する生徒の意識を高め、実践する。	保健相談課 生徒課 各学年	ゴミの分別については改善傾向にあるが、引き続き掃除の時間に美化委員の生徒がゴミ分別チェックを行う。また、消灯に関しては、誰もいない教室の消灯がなされていないことがあった。	【成果指標】（生徒） ゴミの分別、教室やトイレの消灯が正しくなされている。	（生徒）ゴミの分別、教室やトイレの消灯、校内の環境保全活動に積極的に取り組んでいる生徒の割合が Ａ：９５%以上 Ｂ：８５%以上９５%未満 Ｃ：８０%以上８５%未満 Ｄ：８０%未満	Ｃ、Ｄの場合、改善策を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	（生徒）評価Ｂ　９２．６% ・生徒の評価は良好である。ただ、一部の場所でゴミの分別、教室やトイレの電気の消し忘れなどが見られる。ゴミ分別や消灯が必要な理由を考え、行動に移せるような生徒主体の取組を行う。
2	生徒が学習意欲を高め主体的に学ぶ方法を見つけられるよう、教職員は様々なＩＣＴ機器を活用した評価の研究をすることにより指導方法の改善を進める。	①	各授業において、ＩＣＴ機器を効果的に活用した評価の研究を進めるとともに、評価方法の具体事例を教科間でも共有していく。	教務課 各学年 各教科	研修をとおしてＩＣＴ活用力が上がり、ほとんどの教職員が授業で積極的に活用している。今後はＩＣＴ機器を活用した評価の研究を進め、情報の共有を図っていく必要がある。	【努力指標】（教員） 教員は生徒の思考が深まるよう、ＩＣＴ機器を活用した評価の研究を進めている。	（教員）ＩＣＴ機器を効果的に活用した評価の研究を進めることに努めたと回答している教員の割合が Ａ：８０%以上 Ｂ：６０%以上８０%未満 Ｃ：５０%以上６０%未満 Ｄ：５０%未満	Ｃ、Ｄの場合、ＩＣＴ機器の活用方法に関する研修体制を再検討する。	７月と１２月に授業評価（教員）で調査する。	（教員）評価Ａ　８６．０% ・互見授業やＧＩＧＡ研修の実施により、ＩＣＴを活用した評価の研究が進んでいる。今後はさらなる実践と共有を通して、より効果的な方法を探っていきたい。
		②	学習時間調査や面談を活かし、生徒が見通しを持って家庭学習に取り組む態度を育て、学習習慣の定着を図る。	教務課 各学年 各教科	家庭学習状況を担任が把握し、学習内容の偏りや時間不足の生徒に対し、速やかに面談を行い、助言や支援を行っている。家庭学習を前提とした授業展開の工夫を進め、生徒の主体的な学習習慣の定着に向けた取組を継続する。	【成果指標】（生徒） 生徒が、１日平均２時間以上家庭で学習している。	（生徒）１日平均２時間以上、家庭で学習している生徒の割合が Ａ：７０%以上 Ｂ：６０%以上７０%未満 Ｃ：５０%以上６０%未満 Ｄ：５０%未満	学年別に評価し、Ｃ、Ｄの場合、学習指導のあり方を再検討する。	年５回、定期考査開始日２週間前～定期考査終了日前日までの家庭学習時間調査を実施。	（生徒）評価Ｄ　３８．０% ・前期と比較して、２時間以上学習する生徒の数は減少した。評価がＤであることから、生徒が家庭学習の必要性を感じられるような指導のあり方を検討するとともに、評価の観点や判定基準についても、再考が必要である。
3	生徒が充分な情報の中から自分で考え選択し進路決定ができるよう、教職員はキャリア教育の充実に努める。	①	ホーム担任等は面談を丁寧に行い、生徒が将来を見据えて進路目標を設定できるようにする。	進路指導課 各学年	こまめな面談で生徒との良好な関係を築くことができているが、生徒一人ひとりの適性や能力をふまえ、適切な目標設定と将来の進路についてより深く考えるための情報を効果的に提供する必要がある。	【成果指標】（生徒） 個人面談や進路ガイダンスにより、生徒が進路先を検討・比較する情報が提供できている。	（生徒）担任との個人面談や進路ガイダンスにより、進路先について自分で比較し選択するための情報を得ることができた生徒の割合が Ａ：９５%以上 Ｂ：８０%以上９５%未満 Ｃ：７０%以上８０%未満 Ｄ：７０%未満	Ｃ、Ｄの場合、面談内容や時期、および面談回数等、生徒への情報提供のあり方や意識づけ方法を再検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	（生徒）評価Ｂ　８８．２% ・前回評価からさらに評価が上がった。特に３年生で高評価となった。担任を中心にこまめに面談を実施した成果である。今後は担任だけでなく、複数の教員で面談を行うなど、生徒が多方面からの情報が得られるようにしていく。
		②	生徒の進路志望決定に向けて、全教職員で取り組む体制を整える。	進路指導課 各学年	総合的な探究の時間や伏見プラス等、生徒の進路決定に向けた取り組みを行っている。	【成果指標】（生徒３年生） 総合的な探究の時間や伏見プラスの取り組みにより、第１志望決定が適切にできている。	（生徒３年のみ） 総合的な探究の時間をはじめ、伏見プラス等学校の取り組みが、第１志望の決定に役立ったとする生徒の割合が Ａ：８０%以上 Ｂ：７０%以上８０%未満 Ｃ：６０%以上７０%未満 Ｄ：６０%未満	Ｃ、Ｄの場合、面談内容や時期、および面談回数等、生徒への情報提供のあり方や意識づけ方法を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	（生徒３年生）評価Ｂ　７３．３% ・志望理由のグループ発表会や卒業後のキャリアプランのクラス内発表は各自が進路を考える上で効果があり、自身とは異なる志望を持つ級友の考えを聴くことはよい刺激となった。
		③	生徒と保護者に対し、進路選択に役立つ説明会を適時適切に実施する。また、進路志望実現のために必要な学習環境を提供する。	進路指導課 各学年	県内大学等を目指す生徒が多い。志望実現に向けた具体的な目標を提示し、生徒が努力を続けるための意欲を学力面でもサポートしている。	【成果指標】（生徒３年生） 生徒が第１志望の進路先に合格することができる。	（生徒３年のみ）（年度末進路結果） 志望する上級学校に合格した生徒の割合が Ａ：８０%以上 Ｂ：７０%以上８０%未満 Ｃ：６０%以上７０%未満 Ｄ：６０%未満	Ｃ、Ｄの場合、面談内容や時期、および面談回数等、生徒への情報提供のあり方や意識づけ方法を検討する。	９月の進路志望調査と年度末の進路結果で調査する。	（生徒３年生）評価Ａ　８０．８% ・生徒の進路希望が達成できるよう、学力面でのサポートに加え、奨学金などの情報提供を行うなど各方面と連携し生徒を支援する。

	重点目標		具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考	最終評価と今後の課題
4	教職員は生徒が生徒会活動・部活動・学校内外の行事・体験活動をとおして自己肯定感を高めることができるよう支援する。	①	部活動は人間力の向上につながることをガイダンス等を通して生徒に考えさせることにより、加入率を高める。	生徒支援課 各学年 各部活動	「部活動が学校生活を活力あるものにしている」と認識している生徒が多く、生徒は部活動を通して学校生活の充実を図っている。一方で、学年が進むに連れて加入率が下がる傾向があり、３年間継続して活動できるよう、活動内容の工夫や環境づくりに取り組む必要がある。また、教師の時間外勤務の削減を念頭に、短時間で効率的な活動による生徒の満足度の向上を目指している。	【成果指標】（生徒） 部活動に登録した生徒の割合が増加している。	（生徒）部活動に登録した生徒の延べ人数が全生徒の Ａ：８５％以上 Ｂ：８０％以上８５％未満 Ｃ：７５％以上８０％未満 Ｄ：７５％未満	Ｃ、Ｄの場合、各部活動の活動内容・記録等を周知するとともに高校生活を通して部活動を続ける意義を実感させる取組を再検討する。	５月と１０月に部加入率の調査を実施する（３年生は５月のみ）。	（生徒）評価Ｄ　６９．７％ ・運動部の加入率は昨年度42.3%から43.7%に若干向上した。教員と生徒が連携して部活動の魅力を発信する取り組みを考えていく必要がある。
						【満足度指標】（生徒） 生徒が、部活動は学校生活を活力あるものにしていると考えている。	（生徒）部活動が学校生活を活力あるものにしていると考えている生徒の割合が加入者の Ａ：８０％以上 Ｂ：７５％以上８０％未満 Ｃ：７０％以上７５％未満 Ｄ：７０％未満	Ｃ、Ｄの場合、各部活動の活動時間や内容等を検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	（生徒）評価Ｃ　７４．９％ ・部活動活性化に向け、１月に運動部と文化部の合同トレーニングを行った。生徒、部顧問ともに好評であり、定期的に実施したい。
		②	ボランティア活動後の振り返りを充実させ、自己の成長を実感させることで、ボランティア活動に積極的に参加する意識を一層高める。	生徒支援課 各学年 各部活動	伏見川清掃や地元町会と雪かきボランティア協定を締結するなど、地域から信頼される学校づくりの一環としてボランティア活動への参加を促している。	【成果指標】（生徒） 生徒が、ボランティア活動は学校生活の充実や自己の成長につながると考えている。	（生徒）ボランティア活動が学校生活の充実や自己の成長につながると回答する生徒が参加生徒の Ａ：８０％以上 Ｂ：７５％以上８０％未満 Ｃ：７０％以上７５％未満 Ｄ：７０％未満	Ｃ、Ｄの場合、活動計画の周知を徹底するとともに、活動の意義を実感させる取組を再検討する。	７月と１２月に学校評価（生徒）で調査する。	（生徒）評価Ａ　８５．６％ ・昨年度の７４．８％を大きく上回る評価となった。今後は生徒が企画段階から参加できるような取り組みを作り上げていきたい。
5	教職員一人ひとりが１～４の実現に向けて、より効率的かつ効果的な業務遂行を図るとともに、組織的な業務改善策が見いだせるよう努める。	①	効率的、効果的な業務遂行に向け、職員が自身の担当業務だけでなく、課・学年を越えて協力し合うことを心がける。また、行事等の実施時期や内容について全職員に周知する。	教頭 各課・学年主任	多くの職員が依頼があれば協力しあえる職場環境となっている。情報共有を進め、教員一人ひとりが、全体像を把握しアイデアや力を出し合うことで、より効果的な業務改善と教育活動の充実に努める必要がある。	【努力指標】（教員） 教員は効果的な業務遂行に向け日々改善に努めている。	（教員）効果的な業務改善に努めている、概ね努めていると回答する教員の割合が Ａ：８０％以上 Ｂ：７０％以上８０％未満 Ｃ：６０％以上７０％未満 Ｄ：６０％未満	Ｃ、Ｄの場合、次年度の取組を再検討する。	７月と１２月に学校評価（教員）で調査する。	（教員）評価Ａ　８６．０％ ・管理職・各課・各学年間で情報を共有し協力しあいながら円滑に業務が遂行された。
6	教職員は、担当する教育活動の成果等について、学校ＨＰや印刷物等を活用して保護者や地域に対し迅速かつわかりやすく発信する。	①	本校ホームページをより閲覧しやすいように工夫し、保護者や地域、中学生とその保護者等への情報提供を一層充実させる。緊急連絡は、一斉配信メールに加えてホームページでも発信する。	副校長 各課・学年主任	日々の学校生活や行事、部活動などの様子が保護者に分かりやすいよう、学年通信の掲載内容を工夫した。さらに、配信メールで掲載を案内したことや、ホームページ上の写真の掲載方法を工夫したことでアクセス数が伸び、保護者からも高評価を得ている。	【満足度指標】（保護者） 保護者が本校の教育活動全般を理解し、満足している。	（保護者）本校の教育活動を理解し、「大いに満足している」、「満足している」と回答する保護者の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８５％以上９０％未満 Ｃ　８０％以上８５％未満 Ｄ　８０％未満	Ｃ、Ｄの場合、提供する情報の内容やタイミング等について再検討する。	４月から７月と、８月から１２月の集計で評価する。	（保護者）評価Ｄ　７４．４％ ・設問を「本校の教育活動を理解し、その活動内容について満足している」と変更したところ、評価はＤとなった。本校の教育活動についてホームページの更新、学校配信メール等を活用し、より効果的に情報発信していくこととともに、目標にあった達成度判断基準となっているか検討が必要である。

学校関係者評価委員会の評価	・本校では挨拶をしてくれる生徒が多い。今後は「おはよう」だけではなく、相手や場面に応じた挨拶ができるような指導も大切にしてほしい。 ・毎日、少しずつ家庭学習を続けることで、学ぶ習慣が身につき、将来の進路にもつながる。自ら学ぶ習慣が身につくような指導の工夫をしてほしい。 ・ボランティア活動の推進は良い取り組みである。活動を通して達成感や充実感が得られ、自己肯定感が高められる。また、地域の大人と触れ合う機会となり、そこから大きな学びが得られる。生徒に色々な経験をさせてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	・あいさつ運動については、生徒会が中心となり活動していくよう、具体的な取り組みを考えさせたい。 ・授業以外の学習時間の充実を図るため、その必要性について生徒の理解が進むよう取り組みたい。 ・地域の方々を学校行事に招待したり、地域の清掃や雪かきなどを行ったりするなど、地域の方と触れ合う機会を増やす。 ・本校では多くの生徒がボランティア活動に参加しているが、知らない大人との交流により、コミュニケーション力の向上も期待できることから、ボランティア活動の機会を増やしたい。